熊川分水流域における
水利用・地域環境変化と「遊び空間」

○グループ名：熊川分水研究会

・日本研究および社会科教育の大学院生４名で結成。

・大学院の講義「多摩地域の水環境」における史・資料の利用法や巡検などを通して、多摩地域における用水や分水の利用に関心を持つようになり、本活動に取り組む。

○活動概要および目的

承応年間に多摩川から引水し、四谷の大木戸を経て当時の江戸市中に生活用水を供給していた玉川上水は、江戸時代初期から多くの分水を分岐していた。福生市に明治期に新設された熊川分水もそのひとつであるが、これは江戸期の分水とは異なった性格を有していた。江戸期の分水と同様、生活や農業用の水として利用されていたのに加え、水車や動力源としても利用されており、産業用水としての機能も持っていた。

本活動の目的は、熊川分水の形成期から現在までの水利用の変化を明らかにしたうえで、流路周辺地域の土地利用や産業動力源の変質との関連を究明することである。それとともに、今日まで継承され、またこれからも受け継がれる熊川分水が地域の中にどのように根付き、次代の継承者たる子ども、小中学生に「遊び空間」としてどのように利用されてきたのかを明らかにすることであった。

しかしながら調査の過程において、子どもたちにとって熊川分水は「遊び空間」として利用されていないことが明らかになった。そこで、学校教育の場において熊川分水がどのように扱われているのか考えたうえで、身近な水辺環境を知るための学習教材を、熊川分水を事例として提案することを目指した。

第１図　研究対象地域

○活動スケジュール

○熊川分水調査

・天野先生の案内のもと，古地図を用いて熊川分水の流路の把握・予備調査（6 月）
・調査下図の作成（7 月）
・熊川分水関連文献の収集・調査（7 月）
・流路周辺の土地利用調査（8 月～11 月頃）

○遊び調査（8 月～10 月）

・現地観察
・地域の方への聞き取り調査

↓

熊川分水が現在の子どもたちに「遊び空間」として利用されていないことが判明

↓

○身近な水辺環境を知るための学習教材として熊川分水を事例に考察

・副読本の確認
・熊川分水流路周辺の追跡調査
・教材体系図の作成

←分水流域に居住する住民への聞き取り調査！

○活動内容

まず、6 月に講師の天野宏司先生を招いて、調査対象である熊川分水の下見を行った。

熊川分水は、多摩川から分水された玉川上水のさらに分水である。そのため、羽村市にある多摩川から玉川上水への取水堰から玉川上水沿いに歩き始め、玉川上水から熊川分水への分水点（写真 1)、そして熊川分水が再び多摩川に合流する地点までの流路を地図に沿って見ていった。大学のそばを流れる玉川上水とは異なり、細い水路が住宅地の間を縫うように流れ、時には暗渠にもぐり、また地上に顔を出す様子が大変新鮮であった。

7 月には、主に熊川分水に関する文献と地図を読んだ。

それにより、熊川分水の時代ごとの利用法を明らかにした。明治 23 年に完成した熊川分

水は、主に石川酒造の当主を中心として作られた。石川酒造は原料米精製に用いる水車の動力源としての水を得るために、用水が必要だったのである。それに加えて、当時盛んだった製糸業に用いる水力も、熊川分水に設置されていた水車から供給されていた。このことから、熊川分水が酒造用の商工業用水という性格を有していたことがわかる。明治 30～40 年代に入ると、製糸業の動力が水力から蒸気力へと交代してくる。その蒸気のために、水そのものを利用していた。つまり熊川分水はの利用は、開削当初の水車の商工業利用から、動力の変化に伴い工業利用へと変化していったのである。

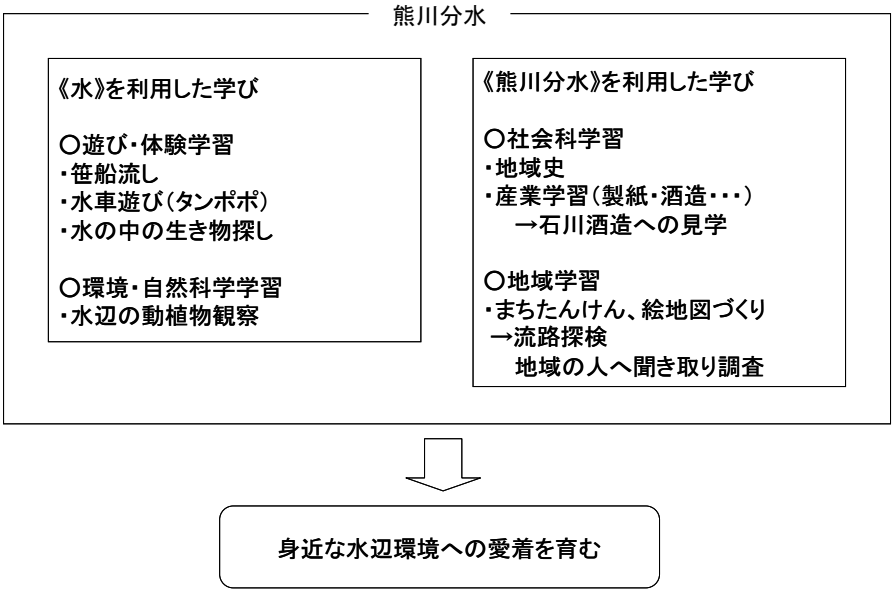
写真 2　洗い場（生活用水）

8 月から 11 月までの間に、数度、現地へ行き、現在の熊川分水の流路の確認と熊川分水周辺の住民に聞き取り調査を行った。聞き取り調査によって、熊川分水は生活用水としても使用されていたことが明らかになった。20 年前までは実際に使用されていたらしく、洗い場に使用したらしい跡も確認できた（写真 2）。製糸業が廃れてからは、主に生活用水として地域住民に使用されていたようである。現在も熊川分水には清流が流れているが、生活用水として使用されることはない。現在は農機具の洗浄や、暗渠化して宅地の一部としたり、作庭の一部として組み入れるなどして利用されている他、地域住民による保全が行われている。

7 月の文献調査と 8～11 月の聞き取り調査によって、当初目的としていた熊川分水における子どもの遊びが確認されなかったため、目的を修正した。これまでの調査によれば、現在の熊川分水についての調査はほとんど行われておらず、また熊川分水を教材とした授業などは行われていないとのことだった。これについては、近くに玉川上水が存在することもその理由として考えられる。そのため、その成り立ちから現在までの利用方法の変化を通じて、身近な水辺環境を知るための教材としての熊川分水の可能性を考えた。

第 2 図は、熊川分水の教材利用方法について、まとめた図である。大きく分けて《水》そのものを利用する学習と《熊川分水》という存在による 2 つの学習が考えられる。

ここに提示した学習は、特にま新しいものでもない。しかしながら、身近に存在する環境、地域教材に目を向けていくことは非常に重要なことである。本事例では特に水資源という点について、より規模の大きい玉川上水の存在によって、身近な存在である熊川分水へ目が向けられていなかった。教育の場において、地域にとってより身近な環境に目を向けることで、失われていた身近な環境への愛着を育んでいく必要がある。



第２図　熊川分水を利用した教材体系図

〇活動の成果

本活動において、私たちは積極的な地域貢献ができなかった。しかしながら、これまで地域の人びとにもあまり注目されてこなかった熊川分水について、その歴史や利用方法について整理することを通して、対象地域にとっての熊川分水という水辺環境のこれまでのあり方を把握できたことは私たちにとって意義のあるものであった。それは、本事例に限らず、身近に存在しすぎていて、改めてその意味を考えたり、重要性を知ったりという機会が失われているもののあることに気付くことができたためである。

日々の生活を送るうえで、分水の存在は必要ではなくなっている。しかしながらその存在から見えてくる、地域の歴史や社会がある。それを知ることによって地域の環境への愛着も湧き、保存・保全につながるであろう。本活動を通して、そのような気持ちを育む教育機会、環境づくりの重要性について考えさせられた。